

# 『こゝろ』の構造

— 隠蔽された「私」の罪と静の言葉 —

佐藤裕子

## 一 はじめに

『こゝろ』論の流れを見た時、次の二つの転換点を指摘することができるだろう。まず一つ目は一九五九年から六〇年代半ばにかけて、従来の下「先生と遺書」中心の読解に対して、「私」という青年の存在に注目しその意味を探ろうとする論の流れが登場したことである。その主なものに玉井敬之氏<sup>(1)</sup>、三浦泰生氏<sup>(2)</sup>、畑有三氏<sup>(3)</sup>、越智治雄の論を挙げることができるだろう。これらの一連の論の注目すべき点は、それ以前の「漱石山房」に出入りしていた人々の論が、必ずといていいほど作中の主要登場人物である「先生」と作者漱石とを重ねて作品を読む傾向があったのに対して、作品そのものから読み取ることのできるもの、すなわちここでは「私」を問題にするという態度を貫いていることである。

二つ目の転換点は一九八五年である。この年に相次いで、「余所々々しい頭文字はとても使ふ気にならない。」という冒頭の一文に着目し、上と中の章が下「先生と遺書」を「差異化する表現」<sup>(5)</sup>を取っていることを読み取り、「私」という青年が「先生と異なる生き方を選択していく批評性」<sup>(6)</sup>をもつ存在であることを指摘した小森陽一氏<sup>(7)</sup>と石原千秋氏<sup>(8)</sup>

の論が登場した。この後、当事者自らが『ころ』論争と名付けた一連の論争が繰り広げられたことは周知の事実であろう。この『ころ』論争をめぐっては、いみじくも飯田祐子氏<sup>(9)</sup>が指摘したように「拒否反応の核にあるのは、共生の可能性ではなく、実は青年の背信」行為にあり、そのことはまさに『ころ』のそれまでの読者の欲望を裏切ることで、逆にはつきりと『ころ』を読んできた読者の心性をうきぼりに<sup>(10)</sup>するものであった。

確かに他の漱石作品と同様に『ころ』冒頭の文章は、多義的な意味をはらんでいる。

私は其人を常に先生と読んでゐた。だから此所でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起こすことに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。余所々々しい頭文字杯はとても使ふ気にならない。

ここで「頭文字」という言葉に「余所々々しい」という負のイメージを喚起する語を使った「私」は、すでに「先生」の遺書を読んでいて、「先生」が友人を「K」と呼んだことを知っている。しかしこの「K」という呼び名について、「K」の本名が作中で明らかにされていない以上、<sup>(10)</sup>「K」が彼の頭文字であると断定することは出来ない。あるいは名前を伏せる場合に、AとかBというように完全に無作為の置き換えをするか、あるいは名前の「頭文字」を使うのが常套手段であるというという慣習に従い、ここでは仮に「先生」がその人物の「頭文字」である「K」という文字を使用したとする。そうすると「先生」が「頭文字」を使ってまで「K」の名前を明らかにしなかったように、「私」もまた「先生」と呼ぶのみで名前は決して明かさなかったという一点において、「私」は「先生」の姿勢を踏襲しつつ、その手記を書き始めているのである。

さらに「K」という呼び方と「先生」という呼び方とは、どちらも匿名であるという一点を除いて、根本的に異なっていることも忘れてはならない。「K」が「頭文字」であろうとなかろうと「記号化された」<sup>(11)</sup>呼び名であるのに対し、「先生」とは「私」という青年にとって「其人」<sup>(12)</sup>がどのような関係にあったかを優先させる呼び方であるからだ。

浅田隆<sup>(13)</sup>氏の指摘した上「先生と私」と下「先生と遺書」の記述の「不整合」な部分をどのように解釈するかという問題や、いくつもの謎、あるいは繰り返し返されるモチーフ<sup>(14)</sup>の意味等、『こゝろ』という作品は実に多くの問題点を含んだ豊かな作品である。その中で読者（論者）が読者（論者）自身の選択した問題を誠実に読み解くという初心を、その豊かさの故にたえず確かめつつ考察を試みるべきであろう。

本稿においては、上「先生と私」中「両親と私」の章で回想されていることを分析し、従来「先生」をはさんで対立するものと考えられてきた「私」と「父」の関係を見直すことと、「沈黙<sup>(15)</sup>」し抑圧されてきたとされる「静」の言葉を、上「先生と私」の章のみならず、下「先生と遺書」の中から拾いだし検討を加えることを目的とする。

註(1) 玉井敬之『こゝろ』をめぐって『日本文学』一九五九年三月

(2) 三浦泰夫「漱石の「心」における一つの問題」『日本文学』十三巻五号、一九六四年五月

(3) 畑有三「心」「国文学」十巻十号、一九六五年八月

(4) 越智治雄『こゝろ』「国文学」一九六八年四、五、七月並びに一九七六年六月

(5) (6) 紅野謙介「小森陽一氏の二著をめぐって——ユートピアの彼方へ」『媒』五、一九八八年十二月

(7) 小森陽一『こゝろ』を生成する「心臓」「成城国文学」一号、一九八五年三月

(8) 石原千秋『こゝろ』のオイディプス——反転する語り——『成城国文学』一号、一九八五年三月

(9) 飯田祐子「対談『こゝろ』論争以後」『漱石研究』六号、一九九六年五月

(10) 「K」の名前のみならず、「先生」の名前もまた明かされてはいない。下「先生と遺書」四十二において、「K」が先生を散歩に連れ出す時に、「Kはしばらくして、私の名を読んで私の方を見ました。」という一文がある。直接話法が多用される「先生」の遺書において、名前を出すことも可能であったのに、ただ「私の名」というに止めているのである。

(11) 平岡敏夫「対談『こゝろ』論争以後」『漱石研究』六号、一九九六年五月

(12) 内田道雄氏（『こゝろ』再考）『夏目漱石——明暗』まで『おうふう』、一九九八年二月）は、「先生」という呼称は「自らと対象との関係の質をあらわす」ものであることを指摘しておられる。

(13) 浅田隆「漱石『こゝろ』論素描——「静」の「純白」をめぐって——」『枯野』十号、一九九三年六月

- (14) 内田道雄氏(前出書)は冒頭の「友人」の許に届いた郷里からの手紙について、「手紙のモチーフ」を指摘されるが、さらに「高等学校時代に早すぎる結婚を強いられる」という内容に則して考えれば、「先生」もまた高等学校時代に叔父の娘との結婚を強いられた存在である。また「遺書」についても、遺書を残し、また残される関係が繰り返されているし、しばしば指摘されてきたように、「先生」も「K」も故郷喪失者であり、また「私」もその可能性が高いこと、さらに「おれが死んだら」という言葉が「先生」のみならず「父」もまた口にすること等、作品内で同じモチーフが繰り返されているのだ。
- (15) 小森陽一「対談『こゝろ』論争以後」『漱石研究』六号、一九九六年五月

二 上「先生と私」の章で回想されたこと

『こゝろ』は、初出において標題が『心』と表記され、「先生の遺書」という副題が添えられている。それは明らかに、漱石がその一行目から先生の死を描こうとしていたことを意味している。さらに大正三年九月に岩波書店から出版される際に「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」の三部構成となったことは周知のところである。つまり漱石の中にはまず「先生の死」を描くことが大前提として存在し、作品は明治天皇崩御と乃木將軍の殉死に先生の自殺を共鳴させつつ、幕を閉じる。残されたのは遺書が一つ、そしてそれを読む「私」である。「私」が知りたいと願った「先生の過去が記された遺書は、「先生」の死と引き換えに「私」の許に手紙という形で届く。その手紙を「袂の中」(中十八)に投げ込み、今しも息を引き取ろうとしている父を残し、「東京行の汽車に飛び乗つ」(同)た「私」が、車中どのような思いで遺書を読み、何を考え、父の死後遺産を引き継ぎ当主となった(であろう)兄からどのような処遇を受けたかには一切触れることなく、「先生」との出会いからその遺書を読むに至るまでを改めて書き記すという回想形式が始まるのだ。内田道雄氏が指摘したように、まさに「遺書は手記執筆の不可欠の前提である一方、手記の中に引用されることによって形を与えられて」いるといえよう。「私」が知りたいと願った「先生」の過去の事実を知るだけなら「先生と遺書」一篇で事足りるにもかかわらず、なぜ上「先生と私」中「両親と私」の章が書かれなければな

らなかつたのか。それは『彼岸過迄』で用いられたへ一人の青年が「すでに起こってしまった出来事」を過去に持つ人間と何も知らないまま出会ってゆくという構図を踏襲し、そのへ過去の出来事」を知らされた一人の青年（「私」）がどのように変化したかを明らかにするために要請された形式なのだ。「私」の前に現れた「先生」の姿は、静かな淋しさに満ちたものであった。この回想形式という作品の構成は、その淋しさを、同じ時間を過ごし、同じ風景を見つめながら、ついには共有することなく「先生」を失うこととなった「私」の限らない痛恨の思いと無縁ではない。まさに長谷川和子氏<sup>(2)</sup>が指摘するように、「この「私」の悔恨が、「先生」とその「先生」の生涯の悔恨に、いかにかわるかという視点の導入こそ、作品『こゝろ』にあつては肝要」なのである。このような思いを根底に潜めつつ、一人残された「私」は手記を書き始めるのだ。

そもそも「私」が「先生」と鎌倉で出会つたのは、高等学校の最終学年より以前のこと<sup>(3)</sup>で、それから大学を卒業するまでの約五年程度の時間を「私」は「先生」と共に過ごすことになる（尚この節での引用は特記のない限り上「先生と私」の章からのものである）。上「先生と私」の章で「私」が回想するのは、五年間の出来事の漠然とした記憶ではなく、五年の歳月の中から「私」というへ語り手」によって任意に選出された（A）室内の十五場面（そのうち二場面は「先生」の留守中の「奥さん」との会話である）、（B）室外の五場面での出来事である。初回の読者には理解できない事柄ではあるが、作品の結構としては、「私」は明らかにへ書き留めておきたいなものか」を有しており、そのために抽出された出来事の記憶によって構成されたのが「先生と私」「両親と私」の章なのである。「先生と私」の章において、「私」によって選出された室内での場面（A）の記憶は次のものである。

- (A) ① 鎌倉の「先生の宿」での事。(三二)  
 ② 「小春の尽きるに間のない或る晩」の事。(六六)  
 ③ 「私の足が段々繁くなつた時のある日」の事。(七七)

- ④ 「夫から四日と経たないうちに又先生を訪問した」日の事。(同)
- ⑤ 「先生の宅で酒を飲まされた」日の事。(八)
- ⑥ 「ある時」の事。(十)
- ⑦ 「私」が「東京へ帰つて少し経つ」た時の事。(十一)
- ⑧ 「先生が迷惑そうに庭の方を向いた」日の事。(十四)
- ⑨ 父の病気のため帰郷するための旅費を「一時立て替へてもらふ」ために先生の家を訪れた日の事。(二十一)
- ⑩ 東京へ帰つてきて「先生のうちへ金を返しに行つた」日の事。(二十四)
- ⑪ 卒業論文作成の助言を得るため「先生の所へ出掛けた」日の事。(二十五)
- ⑫ 「不得要領に終つた」「郊外の談話」の謎を教えてほしいと「先生」に迫つた日の事。(三十一)
- ⑬ 「私」が卒業した「其日」の事。(三十二)
- まず①は、三日前「先生」と懇意になつた「私」が初めて「先生」の宿を訪れる場面なのであるが、「色々な話をした」(二三)中で「何処かで見た事のある顔の様に思はれる」(二二)という自分の印象を語つた「私」に対して投げかけられたのは、「何も君の顔には見覚えがありませんね。人違ぢやないですか」(二三)という「私」の期待を裏切る「先生」の言葉であつた。またここで「私」が「先生」について「非社交的」であると感じたことを裏付けるように「先生」自身の口から普段「あまり交際を有たない」ことが語られている。②においては前章で「先生」を追いかけて雑司ヶ谷の墓地に出掛けた「私」が見た「判然云へない様な一種の曇り」をたたえた「先生」の表情を、ここでもう一度見出し出している。③と④では「私は淋しい人間です」(七)という「自己規定の言葉」が繰り返して語られ、さらに④においては「ことによると貴方も淋しい人間ぢやないですか」(同)という「先生」の目に映つた「私」の姿も語られている。⑤では「先生」夫婦に子供がないことを「天罰だから」(八)と理由付けをして珍しく「高笑い」(同)

をする先生の姿が示される。⑥に関しては明確に室内と断定することはできないのであるが、便宜的に室内での出来事としておく。ここでは「先生」が自分と妻を指して「私達は最も幸福に生まれた人間の一对であるべき筈です」

(十) という「私の耳に異様に響く」「不審」(同) な一句を投げ付ける。これもまた⑤と同様に「先生」の自らの夫婦の有り様を「不幸なもの」とへ自己規定する言葉と考えることができるだろう。⑦では「先生」が「何もしないで遊んでゐる」事についての「先生」自身の理由が語られる。それは「私のやうなものが世の中へ出て、口を利いては濟まない」「何しても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だからしかたありません」というものであった。

⑧では「人間全体を信用しないんです」「私は私自身さへ信用してゐないのです。」という「先生」の基本的な姿勢と「自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」(同) という「先生」の「覚悟」(同) を示されることとなる。さらに⑨と⑬は「私」の父が持病の腎臓病で倒れたことを契機として、繰り返し「死」について語る。「先生」の姿が示される。例えば「私は病気になる位なら、死病に罹りたいと思つてる」(二十一) という言葉や、妻との間で交わされる「おれが死んだら」という仮定法で語られる会話が写し取られる。また⑭では純白の「卓布」(二十二) の話から、「本当をいふと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考へると実に馬鹿々々しい性分だ」(同) というまたしてもへ自己規定の言葉が示される。

⑩では「私」の父の病氣から、横に寝ていた妻さえその死に気づかなかつたという腎臓病で死んだある「士官」(二十四) の話と、「不自然な暴力」(同) での死についての「先生」の会話が示される。⑪では、卒業論文のテーマについて、教えを乞う「私」に対して「先生」は、「以前はね、(中略) 人に聞かれたりして知らない恥のやうに極が悪かつたものだが、近頃は知らないといふ事が、それ程の恥でないやうに見え出したものだから、(中略) まあ早く云へば老い込んだのです」というへ自己分析の言葉を返している。そして⑫において、「先生」は「私」が「本当に真面目」(三十一) であるかを確認した上で、「先生」の「過去を残らず話」すことを約束するのである。(A) において写し

出されているのは、「先生」の〈自己規定・自己分析の言葉〉であり、その〈自己規定・自己分析の言葉〉が何に由来するのか明かさねず、それがそのまま「私」と読者の疑問となっている。

一方室外での場面(B)は次のようなものである。

(B) ①鎌倉で「先生」の眼鏡を拾った「次の日」二人きりで泳いだ事。(三)

②「先生」の後を追って雑司ヶ谷の墓地へ行った帰りの事。(五)

③「先生」が「私」を迎えにきて「一所に麦酒を飲んだ」日の事。(九)

④「花時分」に「先生」と上野に行った日の事。(十二)

⑤卒業論文提出後の「初夏の季節」に「先生」と郊外へ散歩に出た日の事。(二十六)

室外での場面で特徴的なことは、美しい自然の中で前後の脈絡なしに突然にいくつかの断定的な事柄が語られるという構図<sup>(4)</sup>が繰り返されていることである。①では「強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らして」いる中「先生の後につゞいて海へ飛び込んだ」(三)「私」が、「先生」の傍らで「自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂」う情景が描写されている。このような「愉快」(同)な一時を過ごして「先生」と余程懇意になった気でいた「私」はこの後(A)①の場面で「失望」<sup>(5)</sup>(同)を味わうこととなる。②では「晴れた空が身に沁み込むやうに感ぜられる好い日和」の日曜日に「先生」の家を二度目に訪れた「私」は「先生」の奥さんから、「例月某日になると雑司ヶ谷の墓地にある或佛へ花を手向けに行く習慣」で、「たつた今出た許り」であることを聞き出し、その後を追う。そこで「私」は「先生」の「表情の中」に「判然云へない様な一種の曇り」(五)を見出し、「あすこには私の友達の墓があるんです」(同)という情報を得ることとなる。さらに③においては、「私」が「先生」と奥さんが「言逆ひ」(同)をしていいる所を漏れ聞いてしまう場面なのであるが、ここで「先生」の口から発せられた「妻が私を誤解するのです」「妻が考へてゐるやうな人間なら、私だつて斯んなに苦しんでゐやしない」(同)という言葉は重要である。この二つの文



章には共通して、「先生」が（自分は）妻の考えているような人間ではない」という自覚がその根底にあることを明らかにするもので、同時に「その故に自分は斯んなに苦しんでゐるのだ」というのである。そして「苦しんでゐる」ということは「先生」もまた「自ら好んでこのような生活をしているのではない」と考えていることが、この言葉の裏に隠されているのだ。この段階で読者に与えられている「先生」に関する情報は、「先生」が「行きたびに在宅」（六六）であることや、「始終静かで落付いて」（同）いて、「けれども時として変な曇りが其顔を横切る」事があり、それが雑司ヶ谷の墓地に葬られている人に話が及んだ場合に特に顕著に現れることや、「交際範囲の極めて狭い」（七）こと等である。つまり九章というかなり早い時期において、読者は「現在の「先生」の姿は本来のものではない」という認識を植え付けられるということである。④の上野では「恋は罪悪ですよ」（十二）「黒い長い髪で縛られた時の心持ちを知つてゐますか」（十四）という言葉によつて、「私」は混乱させられている。また⑤では「平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それがいざといふ間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。」（二十八）「金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」（二十九）という言葉に続いて、ここでは「先生」自身の口から「血の続いた親戚のものから欺かれた」ことが明かされるのだ。

一方もう一人「先生」から発せられた言葉の意味を痛切に知りたがっている人物が存在する。「先生」が「変化してしまつた人物」であることを、最初に「私」に教えた「先生」の妻「静」である。（B）③の「先生」と「静」との「言逆ひ」がたとえ「滅多に起る現象でなかつた」（十）としても「静」は明らかに現在の「先生」を飽き足らなく思う人物であることは疑いもない。「私」が回想する（C）「静」との会話の場面は次の二箇所であるが、この二箇所とも「私」は「静」に対して「先生」にはできなかつた質問を投げかけている。

（C）① 「先生」が外国へ行く友人を見送りに新橋へ行って留守の時の事。（十）

② 「先生」が上京した友人をもてなすために出掛けた折りに留守居を頼まれた日の事。（十五）

まず①で、へ何故先生が「世の中へ出て仕事」(十一)をしないのかという疑問が「私」だけのものではなく、「静」もまた有するものであることが明らかとなる。「静」は「私」の疑問を裏付けるように「先生」が「若い時はあんな人」(同)ではなく、「全く変つて仕舞つた」(同)存在であることを語るのだ。またここで、奥さんが「先生」の「書生時代」(同)を知っていたことを手掛かりとして、「結婚の奥に横たわる花やかなロマンス」(十二)と「美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つてゐた」ことが「私」によって明らかとされる。②では「静」がへ先生の変化の原因が「自分を嫌ふ結果」(十九)引き起こされたのか、あるいは「人間全体を信用しない」(十四)という「人生観」(十九)からそうなったのかを逆に「私」に問いかけるのであるが、それはもっぱら「おれは斯ういふ性質になつたんだ」「欠点はおれの方にある丈だ」(十八)という「先生」の言葉の意味を未だに理解することができず、納得がいかないことを示している。さらにへ「先生」の変化の根本に「親友を一人亡くした」(十九)ことが関わっていることを疑っていることが語られるのである。

以上のように上「先生と私」の章においては、まず(B)において「先生」の「生きた覚悟」(十五)を裏打ちする「自分自身が痛切に味はつた事実」としての二つの事件の輪郭が明らかとなり、さらにここに(A)で繰り返される「先生」のへ自己規定の言葉が何に由来するのかという問題と、(C)で「静」が「私」に打ち明けたへ一人の親友の死がどのように関わっているのかという問題が提示されている。これらは「私」の記憶によって再現された事柄なのであるが、さらにここに唐突にへ「私」が現在抱えている「先生」についての感慨<sup>6</sup>が四、六、七、十二章に挿入されるのである。ここで(A)(B)(C)で提示された問題と、現在の「私」によって示された断定的な「先生」像とによって、肝心の部分は秘められたままにせよ、読者は「私」のへ語りによって、「先生」の人物像をかなり明瞭に形作るべく強く誘導されているといえよう。

ここで「私」は、一旦東京を離れ、両親の待つ郷里へ帰ることとなる。次に中「両親と私」の章で明らかとなるこ

とは何か。

註(1) 内田道雄『「こゝろ」再考』『夏目漱石——「明暗」まで』おうふう一九九八年二月

(2) 長谷川和子『「こゝろ」論』『日本文藝研究』第三十三卷二号、一九八一年五月

(3) 鎌倉での「先生」との出会いの後、「先生を訪ねる積で東京へ帰つて来た」「私」は「新しい学年に対する希望と緊張とを感じた」とあることから、「先生」と会った時は少なくとも高等学校の一年から二年に移る場合か、二年から三年に移る場合の二つの可能性が考えられる。

(4) 由良君美(『「こゝろ」の構造』『国文学』二十六卷十三号、一九八一年十月)は、『こゝろ』の中に埋め込まれているサスペンスの構造について、「一つは対話の文脈からはずれた突然の断定によるもの、もう一つは「先生」の口にしたがらない「恐ろしい悲劇」を暗示し憶測にさそう台詞によるもの」の二つを指摘している。

(5) 確かに石原千秋氏(『「こゝろ」のオイディプス——反転する語り——』『成城国文学』一号、一九八五年三月)が指摘するように、「私」は常に「満たされない」思いを抱え続け、そしてそのことの故にますます「先生」に対する傾斜を強めていくのである。  
 (6) 「他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑してゐたものと見える」(四)、「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手を広げて抱き締める事の出来ない人、——是が先生であつた。」(六)、「先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである。」(七)、「先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つてゐた。」(十二)などの表現である。

### 三 中「両親と私」の章で回想されたこと

上「先生と私」の章で、「先生」が「私」の抱く疑問に対して口を閉ざし、何も語らなかつたのに比べて、中「両親と私」の章で描かれる「父」は「私」に対して幾度か自らの真情を吐露していることには注意が必要であろう。「私」がことごとく「先生」と「父」とを比較し、「父」に対する軽侮の念を募らせてゆくのに対して、「父」は自分の存命中に息子が大学を卒業することの意味や、卒業祝いの宴席を設けることの原因を、ためらいつつも語っているのみならず、父はまた「私」の就職について、あるいははしかるべき職が見つかるまで仕送りを無心する「私」に対して、

愚痴ともつかぬ「小言」(八)をもらすのである(尚この節での引用は特記のない限り中「両親と私」からのものである)。ここで「父」が「私」に対して期待することは、「卒業した以上は、少なくとも独立して遣つて行つて呉れなくちや此方も困る。」(六)という言葉が示すように、「世の中へ出て」「相当の地位を得て働く」(同)ことである。つまりこの根底にあるのはいみじくも「兄」が「先生」を評して語った「何もしないで生きてるやうといふ」「横着な料簡」(十五)を許さぬ態度であり、人として生まれた以上は「自分の有つてゐる才能を出来る丈働かせなくちや嘘だ」(同)という認識によるものである。「私」はこの「兄」の価値観を「父と全く同じ」(同)だとして反発する。しかし上「先生と私」において「私」が「先生」に対して、「先生の学問や思想」(上十一)が「丸で世間に知られてゐない」(同)ことを「惜しい事」(同)だと迫つた背景には、まさしく「父」や「兄」と同質の認識が存在している。そもそも「私」と「静」とが「先生」に「希望」(十八)したことは、「世の中へ出て仕事」(十一)をすることであり、「世間的にもつと活動」(十八)することであつたことを忘れてはならない。まさに「父」が「私」に求めたことと全く同じことを「私」は「先生」に求めていたということである。「先生」もまた若い頃は「K」と一人で「天下を睥睨」(下十九)し、「實際偉くなる積でゐた」(同)ことは「先生と遺書」に記されている通りであるが、若い頃のみならず、「先生のやうにごろ／＼許してゐちや」(上三十三)という「静」の言葉に対して、「ごろ／＼許してゐやしないさ」(同)と否定した「先生」の言葉の中にも実は若い頃と同じ認識が宿つてゐることが伺える。「父」と「先生」と「私」とが無意識の内に共通して抱いてゐたこの認識こそ、そしてまた「私」の「兄」が見せる「世の中では是から仕事をしやうという気が充ち充ちてゐる」(十五)様子こそ、まさに明治の繁栄を築き上げ、支えてきた精神なのである。あるいはそれをへより良い状況を作ることを目指す精神へ、へ文明の発展のみを優先する時代の要請を疑うことをしない精神」と言い換えることもできるだろう。しかも「兄」が「私」に「此所へ帰つて来て、宅の事を監理する気はないか」(十五)と持ちかけたということは、「兄」が田舎へ帰つて来ては「仕事」が出来ないと考えていることを露にするものでもあ

った。「兄」はさらに続けて、「伯父」(同)に世話を頼む可能性(この「伯父」が財産を横領する可能性も出てくる)も示唆しており、ある意味で「兄」もまた「故郷遺棄者」<sup>(1)</sup>の一人であるといえる。「イゴイスト」(十五)とは、自分の仕事のために家督を次男に押し付けようとする「兄」にこそむけられるべき言葉であろう。「小供に学問をさせるのも、好し悪しだね。折角修業をさせると、その小供は決して宅へ帰つて来ない。是ぢや手もなく親子を隔離するため学問させるやうなものだ」(七)という「父」の嘆きは、まさに時代のはらむ矛盾を露呈するものでもあったのだ。

「両親と私」の章において回想されるのは、「父」や「兄」ばかりではない。「母」に関する記述も多く登場している。「私」は「母」を「都会から懸け隔たつた森や田の中に住んでゐる女」(二)と規定し、そこを基点として「母」の言動を観察し、そこに批評を加えてゆく。「父」の病状について「丸で無知識」(同)なことや、「自分で死ぬくつて云ふ人に死んだ試はない」(同)という「陳腐」(同)な言葉や、「口数」(三)ではかなわれないが、「女だけにしどろもどろな事を云ふ」(同)「母」の描写の裏には、明らかに「日本一の大きな都」(五)に住み、「理解力」(上十八)と「旧式の日本の女らしくない所」(同)を備えた「静」の存在が垣間見えている。ところが容体が確実に悪くなっているにもかかわらず旺盛な食欲を見せる「父」に対して、「失望していゝ所に却つて頼みを置」(同)く姿や、「今に癒つたら」(十)という「父」の言葉に調子を合わせたり、「涙ぐむ」(十六)「母」の心情と、「先生」が執拗に「自分の死」(上三十五)を話題にした折りに、「笑談らしく」(上三十四)「わざとたわいのない受け答えをし」(同)、最後に「感傷的な女の心を重苦しくした」(同)「静」の心情と、どれほどの懸隔があるといふのか。学問をして都会で生活したことがあるかどうかの違いを除いて(確かにこの相違は重要なものではあるのだが)、「父」と「先生」と「私」とが一度は同じ価値観に生きる人間であったように、「母」と「静」もまた男たちと同様に「都会生活の体験者」<sup>(2)</sup>であるかどうかという違いこそあれ、本質的に変わることはない存在といえる。

中「両親と私」において、「私」はその時自分がどのような感情を抱いたかを含めて、「父」が「私」に期待したこ

と、また「兄」が「私」に押し付けようとしたことを丹念に回想する。そして「兄」が「先生」を評して「イゴイスト」と呼んだ時、「兄に向つて、自分の使つてゐるイゴイストといふ言葉の意味が能く解るかと思ひ返して遣りた」(十五)いと感じた「私」は、現在は自分もまた同じ意味において「イゴイスト」だったことを認識している。なぜなら「私」もまた「先生」に対して「父」や「兄」と同じ要求をしていたからであり、そのことに気づいていなかったところだが、「私」が「先生」という存在を何も理解できていなかったことを証しするものであるからだ。

かくして「私」は「先生」の遺書一つを携え、臨終の床にある「父」を見捨てて、「母と兄あての手紙を書き」「宅へ届け」(十八)させた上で東京に戻る。黙つて家を飛び出したのではなく、手紙を残して家を出たということは、「御前此所へ帰つて来て、宅の事を監理する気はないか」(十五)という「兄」の申し出を拒絶し、二度と家に戻る気はないという意思表示をしていることでもある。「私」の家の格式にもよるだろうが、「私」が病床の「父」か、「母」か、あるいは一旦家督相続者となった「兄」から絶縁されたかどうかの可能性はもはや問題ではない。「私」はこの時、まさに自発的にへ故郷を捨てたのである。

このように中「両親と私」の章の意義は、上「先生と私」において「私」が「先生」に向かって発していた言葉が、父と兄から提示された価値観と同じ価値観に基づく発言であったことに気づくところにあるといつていいだろう。つまり中「両親と私」の章は「私」の言葉が、外ならぬ「私」が軽蔑していた父と兄の言葉によってへ相対化される場として要請された、まさに欠くべからざる章なのである。

註(1) 小森陽一『『こゝろ』を生成する『心臓』「成城国文学」一号、一九八五年二月

(2) 越智治雄『『こゝろ』』漱石私論 角川書店、一九七一年六月

## 四 遺書に隠された「静」の言説

「私」が「先生」と出会い、その出会いの中で変えられてゆくが、変化してゆく「私」によって、「先生」もまた変えられる。このことは、最も少なく見積もっても、書くはずのなかった遺書を、「先生」が残したということの中に確かめられるであろう。

私は何千万とある日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから。私は暗い人生の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。然し恐れては不可せん。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい（下二・尚この節での引用は特記のない限り下「先生と遺書」からのものである）。

以上のような理由で書き始められた遺書は、「先生」の両親の死から「先生」が故郷を捨てることを決意するまで、「先生」が「騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構へ」（十）そこにKが同宿するまで、Kが自殺するまで、そしてKの死後から現在まで、大きく四つの部分に分けることができるだろう。

「先生」が「変化した存在」であることは、上「先生と私」の中すでに妻「静」によって指摘されていたが、その「変化」とは「静」が結婚後に認めた変化である。ところが「静」が「頼もしい人」と考えていた若かりし頃の「先生」が、実は自分自身を「変化した存在」と見なしていたことには注意しなければならぬだろう。その「変化」は両親の死と、叔父の財産横領を契機として自覚されたものであるのだが、「先生」はまず自分が両親の「たつた一人の男の子」（三）で「鷹揚に育てられた」（同）ことを振り返りつつ、次のように語る。

私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにゐて呉れたなら、少なくとも父か母か何方か、片方で好いから生きてゐて呉れたなら、私はあの鷹揚な気分を今迄持ち続ける事ができたらうと思ひます。（同）

この「鷹揚」な自分が、「国を立つ時既に厭世的」(十二)になり、「他は頼りにならないものだといふ觀念が、其時骨の中迄染み込んでしまつたやうに思はれた」(同) というのである。これこそが、「先生」が「静」とその母の前に現れた時の姿である。叔父の裏切りを知つた「先生」は、「思案の結果、市に居る中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、凡て金の形に変へ」(九)「永く故郷を離れる決心」(同)を固める。下宿を出て「一戸を構へる氣になつた」(十二)のも「鋭く尖つてしまつた」「私の神経」(同)の故であり、「元の通りの私ならば、たとひ懷中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつた」(同)といふのである。このようにして「先生」は、未亡人とその娘「静」の二人ぐらしの「素人下宿」(十)に移ることになる。まさにこの「金に不自由がなければこそ」(十二)という「余裕」(同)こそが後の悲劇を引き起こし、そしてその大本には両親の死によってへ変化した私<sub>レ</sub>がいたといふのである。確かに叔父もまた「先生」の両親のどちらかが生きていれば、財産を横領することもなかつた訳で、ここにおいて上「先生と私」において提示された二つの事件が結びつくのである。

その下宿での未亡人とその娘と「先生」の三人での生活については、十一章から十八章までに描かれるのであるが、そこでは叔父の裏切りによる「厭世觀」と、「鷹揚」な性質と同時に身に備わつていた「物を解きほどこいて見たり、又ぐるぐ廻して眺めたりする癖」(二)によつて、同居することになつた母娘の一举手一投足の全てが「先生」の觀察と分析の対象となり、「先生」によつて意味付けられてゆく経緯が詳細に綴られている。そこで語られていることは、まず「静」が徐々に大胆になつて行くことへの疑問であり、またその母である未亡人が「先生」を信賴しているのか、それとも「警戒」(十二)しているのか、その真意がどこにあるかを疑っている。ここで「先生」は、慣れと親しみとの度合いが増すにつれて打ち解けてゆく「静」の変化を、「技巧」と見なしているのである。そして同時に「先生」がどうしようもなく「静」に魅せられていることが繰り返されるのであるが、「三人の關係」(十四)が「下宿した始めよりは段々複雑になつて来た」(同)頃、「先生」は「国元の事情」(十五)を全て母娘に打ち明けている。この後益々



「先生」を厚く遇するようになった未亡人の態度の中に「叔父と同じやうな意味で、御嬢さんを私に接近させようといふ力めるのではないか」(同)と考え出すのであるが、「先生」がこのように疑う根拠となつた「些細な事」(同)の積み重ねとは、あながち「先生」の「猜疑心」(同)によるものだけとはいえないであろう。田中実氏<sup>(1)</sup>が指摘したように、まさに「先生」は経済的にもまた世間的にも「夫にふさはしい」人物なのである。すでに両親もなく、また帰るべき家もなく、財産を持ち、まさにこれほど娘を託するのに「都合の良い男」はいない。当時の結婚制度からいって、格式のある家の長男に嫁ぐということは、夫の両親や夫の兄弟姉妹、さらには一族郎党すべてに目配りをし、家政の切り盛りをし、<sup>(2)</sup>家を盛り立てるべく采配をふるうことであるから、ある意味で夫となる人物の内実など副次的な問題となるほど苛酷なものである。その現実を知り尽くしている母だからこそ、娘に因習に捕らわれる必要のない、気楽な結婚を望むのである。十七章において「先生」は母娘と三人で「日本橋」(十七)へ出掛け、自分の着物と日頃のお礼として「静」に着物を買うのであるが、級友に「調戲はれる」(同)までもなく、三人で連れ立って歩く様子や、「先生」が「静」の着物を見立てる様子はまさに仲の好い夫婦とその母親の姿そのものである。しかもこの後夕飯を食べるために立ち寄った店は、「狭い横丁」(十七)を入った所であり、「此辺の地理を一向心得ない」(同)者にはわからない場所にあつた。ということは、この店が未亡人にとって馴染みのある店であり、そのような店に若者を連れて行くということとは、ある意味でその若者を母娘にとって、かなり親しい人物として披露する意図があつたとも考えられるのである。ともあれ「先生」はこの三人連れ立っての外出の意味、すなわち「静」と夫婦と見られることを十分すぎるほど理解していたからこそ、大学で級友に「調戲はれ」(同)たことを伝えた時に、未亡人に素直に応じることができなかつたのである。ここで「先生」は「肝心の自分といふものを問題の中から引き抜いて」(十八)「御嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探る」(同)のであるが、この談話の後「席を立ち掛け」(同)た「先生」に、未亡人は「静」を「早く片付けた方が得策だらうか」(同)と問いかけている。これはまさしく「先生」に対する結婚の打診

である。しかもこの場に「静」も同席しており、話の最中に「静」が「先生」に買ってもらった「反物」(同)を「膝の上へ出して眺め」(同)てもいるのだ。女にとって、自分の好みの反映された着物を贈られることは心ときめくことである上に、ましてやそれが母も気に入る、自分もまんざらではなく想う男からの贈り物なのであるから、「戸棚から」(同)反物を引き出して「眺める」という行為が何を意味するかはすでに明瞭であろう。この「索引の附いてゐる」(『三四郎』八)「静」の心さえ信じていることができずに、「御嬢さんが此問題について何う考へてゐるか、私には見当が付きませんでした。」(同)と書き記すのが「先生」なのである。これはまさに高田知波氏<sup>(2)</sup>が指摘したところの「静の内面に対する想像力を欠いたかたちで自分の〈物語〉の中に封じ込めていく」「先生」の姿勢であり、この姿勢はその後登場する「K」にも向けられてゆくのである。ともあれこのように「先生」が認めると認めないに関わらず、「先生」と「静」との結婚が具体的な様相を帯びて来た矢先に、「K」が登場する。

未亡人とその娘の二人だけの生活に「先生」が新たに加わることによって、その関係が「段々複雑になつて」(十四)行つたように、「先生」と「静」の関係も新たに「K」という人物が加わることによって、「先生」の「運命に非常な変化を来す」(十八)ことになる。「先生」と「K」との関係がどのようなもので、また「K」が「先生」の下宿に引き取られることになるまでの経緯については、十九章から二十二章にかけて詳しく述べられている。この中で注意しなければならないのは、「先生」が〈両親の死〉によってその性格が〈変化〉したように、「K」の「性格の一面」(二十一)が〈母の死〉に関わつて「継母に育てられた結果とも見る事が出来る」(同)とされている点である。

そもそも「K」が「先生」の下宿に引き取られることになつたのは、養家との義絶、復籍、実家との絶縁という経緯の中で仕送りが途絶え、「勉強の手を緩めず、新しい荷を背負つて猛進した」(同)結果、「過度の労力」(二十二)が祟つて「健康と精神の上に影響」(同)し始めたことによる。これら一連の出来事を引き起こしたその源に、「K」が目指した「道」があることはいうまでもない。この「道」とは、まさに「先生」の語るように「醉狂」(二十一)で

あり、「我慢と忍耐の区別」(二十四)のつかない「事理を弁へ」(同)ないことであり、まさに「自分で自分を破壊しつつ進む」(同)ものであったのだ。このようにして「先生」と「K」とは殆ど時を同じくして共に「故郷遺棄者」となるのだが、小森陽一氏<sup>(3)</sup>が指摘するように、「先生」が「裏切られた」ことによって故郷を捨てたのに対して、「K」が周囲を「裏切っていた」こと<sup>(3)</sup>によって故郷を捨てたという違いは大きい。何故なら、たとえ覚悟の上とはいえ「K」が否応無く故郷には戻れない存在となつてしまつたのに対し、「先生」は自ら財産を処分し故郷を出た存在であり、再び故郷に戻れないという理由はない。まさにより強い意志によつて「故郷遺棄者」となつているのである。とするならば、「K」の目指した「道」とは、奥野政元氏<sup>(4)</sup>が指摘したように「概念的で抽象的なものとして確立するのみで、日常的現実的な生の場で実体化できないようなもの」であり、まさに「人をして生に赴かせるよりは、むしろ死にいたらしめるもの」であるのだ。

「先生」は自ら「奥さんと御嬢さんに、成るべくKと話をする様に頼」(二十五)んでおきながら、母娘が(とりわけ「静」が)「K」と親しくなつて行く様子を目の当たりにして、かつては「静」とその母に向けた「研究的」(上七)で猜疑心に満ちた目を、今度は「静」と「K」に向け始める。この猜疑心は、まず房州旅行を頂点として、次に「K」が「静」への「恋心」(二十六)を打ち明けた後は如何にして「K」に「打ち勝つ」(三十七)かをめぐつて急速に高まつてゆく。「K」がある日「先生」に向かつて「女はさう軽蔑すべきものでないといふやうな事」(二十五)を言い出した時、「先生」は「K」の「変化」に、さらにいうならば「静」への恋心に気づくべきであったのだ。「先生」の目には「K」が、三十六章において「御嬢さんに対する切ない恋心を打ち明け」た後にさえ、常と変わらぬ「同じ調子」(二十八)を保っているように感じているのである。前述したように、この時「先生」は「K」の内面に思いを致すという可能性を自ら閉ざしているのだ。

そもそも未亡人が「K」を預かることに渋々ながらも同意したのは、何よりも「先生」の意向を重視したことによ

る。「K」を厚く遇することは、同時に「先生」を立てることもなることに、「先生」自身は気づいていない。「K」が同居するようになって、未亡人は「K」をはさんで「静」が「先生」の癪にさわることを口にした場面で、「睨めるやうな眼」(二十七)を「静」に向けている。これもまた、未亡人が「K」にはではなく、「先生」により多く気を使っていることの証左なのだ。

「先生」はその遺書の中で繰り返し「K」の優位を語っているが、「K」よりは「私の方が能く事理を弁へてゐると信じてゐる」(二十四)るし、また「K」が「恐るべき男で」(同)「偉大」(同)なのは、「自己の成功を打ち砕く意味に於て、偉大なのに過ぎない」(同)とまで断言するのである。そもそも「先生」が「K」を下宿に引き取ったのも、内田道雄氏<sup>(5)</sup>の指摘するように「異質な原理に生きはじめた「K」に、優位者としてふるまうことを庶幾した挑戦的行為」なのである。「先生」は養家と実家との板挟みになった「K」に「物質的補助」(二十一)を申し出たとき、これを拒絶した「K」の意向を尊重し「彼の思ふ通りにさせ」(同)ている。また「K」を引き取る折りには、たとえ説得のためとはいえ「仕方がないから、彼に向かつて至極同意であるやうな様子」(二十二)を見せ「彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪まづく事を敢てした」(同)というのである。さらに「成るべく彼に逆らはない方針を取」(二十三)ったことや、「彼と喧嘩をする事は恐れてはゐない」(二十四)けれども、「批評がましい批評を彼の上に加へずゐた」(同)というのである。これらの記述が意味しているのは、当時「先生」が「K」に対して本心を隠したまま接していたということであり、「K」を刺激しないためとはいえ、「K」を騙っていたということである。そしてこの不誠実な態度こそが「かつては其人の膝の前に跪びいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのである」(上十四)の言葉が発せられる背景となるのだ。そして「K」は一人自裁して果てる。「先生」が「K」を出し抜いて未亡人に「静」との結婚を申し出たことは、確かに「利己心の発現」(四十一)によるものであり、裏切りに裏打ちされた「愛」はすでに「罪」を孕んでいるのであるが、何よりもそれ以前に「K」に対する「自分」の態度が徹頭

徹尾「K」を欺くものであることに気づいたのだ。『こゝろ』においてはともすれば「先生」と「K」との恋愛をめぐる葛藤にのみ議論が集中する傾向があるが、実はもつと根本的な部分において裏切りは実行されていたということである。

「K」の死後、「卒業して半年も経たないうちに」（五十一）「先生」は「静」と結婚する。「K」の死の原因が自分にあると考えていた「先生」は、結婚が「新しい生涯に入る端緒」（五十二）となることを期待するが、皮肉なことに「静」が仲立ちとなつて「K」を忘れることができず、一旦は「猛烈な勢いをもつて勉強し始め」（同）るがそれも長くは続かない。結局職業につくこともせず、手をこまぬいて日々を暮らす「先生」は、次に「酒に魂を浸して、己を忘れやうと試みる」（五十二）。この状況を快く思わない未亡人の苦言と、夫が荒れる原因がどこにあるかわからないままに板挟みとなりながら、「静」は繰り返して「先生」になぜそのようになったのか、その原因を問いただそうとしているのである。上「先生と私」において、「私」が一度だけ遭遇した「言逆ひ」は、実は「先生」と「静」にとつていやというほど繰り返されたことだったのである。しかも「先生」によつて「遠ざけ」（五十二）られた「静」は「行人」のお直のように「親の手で植付けられた鉢植のやうなもので一遍植ゑられたが最後」「凝としてゐる丈」（「塵勞」四）と諦めるのではなく、事態を少しでも良い方向へと進めるべく、「先生」に詰め寄っている。これはつまり夫の苦悩の根源を取り除きたいと願うことであり、同時に夫の苦悩を自分も共有したいと願うことである。夫の中に「変化」と「異常」<sup>6</sup>とを見出し出した「静」がそこから夫を救い出そうと試みていたということだ。「先生」の遺書から類推される「静」の姿とその言葉は、夫である「先生」を見つめ決して離れることはない。しかもそればかりではなく、中「両親と私」において、「私」が「おれが死んだら」という言葉を繰り返す父を慰めるのに、「私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかつた」と語るように、夫の苦しみが何に由来するかをつかめないまま、その苦しみを少しでも緩和するために夫を慰撫する術も知っている女性なのである。これこそが「静」が「私程先生を幸福にできるものはない」

(上十七) と言いつ切る自信につながり、また「先生」が今日まで生き続けてきた理由となるべきものなのだ。まさに「静」とは、従来の漱石作品に描かれてきた妻たちとは異なり、苦悩する夫に繰り返し語りかけ、全的に関わろうとすることをあきらめない女性なのである。

註(1) 田中実「『こゝろ』という掛け橋」『日本文学』十二号一九八六年十二月

(2) 高田知波「『こゝろ』の語法」『日本の文学』八、一九九〇年十二月

(3) 小森陽一「『こゝろ』を生成する『心臓』」『成城国文学』一号、一九八五年三月

(4) 奥野政元「『こゝろ』ノート」『活水論文集』三十三号、一九九〇年三月

(5) 内田道雄「『こゝろ』再考」『夏目漱石—『明暗』まで』おうふう一九九八年二月

(6) 戸松泉氏(『悲恋小説としての『こゝろ』』『漱石研究』第三号、一九九四年十一月)に同様の指摘がある。さらに氏は、「静」が「夫との『心の橋』を掛けるべくその情熱を持ち続けていた女性」であるとしておられる。

## 五 おわりに

『こゝろ』ではまず二人の人間が登場し、そこにもう一人新たな人物が加わることによって関係が複雑化し、その複雑さが頂点に達すると一人がその関係から脱落し、今一人新たな人物が加わることによって新しい三人の関係が作られるという構図が繰り返されている。初めは未亡人と「静」の二人きりの生活に「先生」が加わり、次にこの関係が複雑さをましました頃「K」が登場する。今度は「先生」と「静」と「K」の三人の関係の複雑さが頂点に達して「K」が自殺し、その後は再び未亡人と「静」と「先生」の関係に戻る。未亡人が腎臓病で死んだ後は「先生」と「静」の二人きりの生活になっている。そこに「私」が登場し、<sup>(1)</sup>「先生」の死によって三人の関係が崩れるところで物語は終わる。繰り返されるのはそればかりではない。

「先生」に見えなかったものは「K」と「静」の心であり、あれほど叔父の裏切りを憎んだにもかかわらず、いと

もたやすく「K」を裏切っていった自らの心である。「私」に見えなかったのは、「先生」がなぜ何もせず生きてきたかということであり、自分が軽蔑していた父や兄と同じ価値観に生きていたことである。否、見えなかったのではない。見えていたにもかかわらず、知ろうとしなかったということである。「先生」も「私」も、へ知ることにおいて失敗した男なのだ。遺書において「先生」は「私」に、栄耀栄華とは無縁に、際立ったことは何もせず静かに生きてきたことの中で、へ生きる」ということの孕む矛盾と苦悩を開示してみせる。そして、「死んだ気で生きて行かう」（下五十四）という「先生」の行為こそ、進歩と発展を疑うことをしない「明治の精神」（下五十五）に対する深い懷疑を示すものであったことを「私」は知るのである。その意味で『こゝろ』とは、すぐれて二十世紀的な作品であるといえる。

註（一）松本寛は（『『こゝろ』論——自分の世界と他人の世界のはざままで——』夏目漱石——現代人の原像』新地書房、一九八六年六月）の中で、「私」の登場が「先生」の「自殺の直接の契機」となっていることを指摘している。

\*引用は、一九六五年版漱石全集（岩波書店）による。また旧字体は新字体に改めた。